
絆は途絶えない

H & Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆は途絶えない

【Nコード】

N97650

【作者名】

H&Y

【あらすじ】

オレはツバサ

根無し草。

家族も友達もいない、一人ぼっち。

だけどあの日・・・

第一章～少女～

第一章～少女～

・いつも通りに依頼を完了
帰る所も特に無い。

「どうすっかな」

もう日も落ちた。

「また野宿かよ」

何気ない1日、ねむれそうな所を探し、歩き出す。
・・・だがその時

「キャアアー！！！！」

「へ？」

声の主は・・・少女だった。

「ハア！？」

少女が空から降ってきたのだ。

「どいてえええ！！！！」

「へ？へ？？」

完全に混乱している。

（ドカアアン！）

きれいに衝突。

「痛てえ・・・」

「大丈夫！？大丈夫！？」

そう言って少女は、

首をガクガクと揺らす

「いや、大丈夫じゃねえ・・・」

「お話出来るって事は大丈夫だね！良かった」

「コイツ勝手に解釈しやがった・・・」

「つつかお前何者？名前は？」

突然降ってきた謎の少女にツバサは疲れた目で名前を聞いた。

「ふえ？名前？シルキーだよ？シルキーⅡオリビア。君は？」

「んあ？オレはツバサ」

あどけない笑顔を見せる彼女にツバサは不思議な印象を持った。

普通の少女ではないと思わせる彼女にツバサはなぜか落ち着いた。

「そっかあ、いい名前、よろしくねツバサ君」

「ん？ああ。」

（ツバサ「君」ねえ・・・）

ツバサにとって名前を呼ばれるのは、とても新鮮だった。

「ツバサ君は何してる人？」

「え？」

「例えばさあ、旅してるとか？」

「じゃあ旅してるかな？」

「へーじゃあツバサ君の家はどこにあるの？」

そう言ってシルキーは目を輝かせる。

「ない。」

「え?!無いの?!じゃあ家族は？」

「いない」

「友達は？」

「いない」

しばらく沈黙が続いた。それを打ち破ったのはシルキーだった。

「一人ぼっち・・・なの？」

「ああ」

「そーなんだ・・・」

自分の事でもないのに、オレが一人だと言うと、シルキーはとても寂しそうな顔をした。

「人から依頼を受けて、その金で生活してる。世間で言う根無し草だよオレは」

そう言うのと、シルキーはオレを見つめた。

「な、なんだよ・・・」

シルキーはプルプルと震えている。

「かつ、かつこいい！ツバサ君！私も連れて行って！」

「ハアアア!？」

「ダメなの？」

「いやダメじゃないけど、悪く言っちゃえばホームレス見てえな感じだぞ？それでもついてくんの？」

ツバサは、嬉しいんだか困っているんだか、おかしい顔をしている。

「うん！ツバサ君のこと一人に出来ないし！私も旅したい！」

「わかった。後から後悔すんなよ？」

今度は、ツバサも嬉しそうな顔をしている。

「ヤッタァァ・・・」

不気味に光る月がのぼる夜、シルキーの叫び声が響いた。

そして、あの日オレは、一人ぼっちから抜け出した。

一章終

第二章く神の見習いく（前書き）

「依頼おしまいなの？」

オレの隣で、黄色い瞳の少女、シルキーがはしゃいでいる。

「ああ。終わりだろ。」

今まで一人だったオレの隣になぜ彼女がいるか？

第二章く神の見習いく

不気味に光る月が浮かぶ暗い夜空。

依頼を終えたオレは、休息をとるため、休めそうな場所を探し、歩いていた。

その時、甲高い悲鳴が轟いたのだ。

空から謎の少女が降ってきた。

そう、今オレの隣ではしゃいでいる少女、シルキーは、空から降ってきたまさに

謎の少女なのだ。

「謎の少女・・・」

つい口をついて、出た一言、それは彼女の耳に届いたようで・・・

「ん？なんか言った？」

「うん。言った」

「なあに？なんて言ったの？」

ポカーンとしているシルキーに、オレは、思い切って聞いてみた。

「お前さあー？何で上から落ちてきたの？何者のわけ？」

「え？私はねく修行してたの」

「へ？」

今度は、オレがポカーンとしている。

「しゅ、修行って何の？」

「神になるためのだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ハアアア！？神い！？」

オレは、驚きを隠せず、叫んだ。

「うん。神の見習いな私。」

「ん？見・習・い？っっー事は、すでにお前神なの・・・？」

「うん。私はね正式な全能の神になるために、下界に修行に来たの。だけど下界に降りる時、間違えて落ちちゃったの。」

笑いながら平然と衝撃の事実を話すシルキーにツバサは唾然としている。

「私の修行の内容は、世界中に散らばる、この世界に存在する聖霊や神獣の力を宿した宝玉を集めて力を手に入れる事と、

下界に住む、魔獣を倒して、強くなること。」

「すげーな・・・」

あまりに壮大過ぎる話を聞いて、ツバサは口をあんぐりと開けている。

「そうそう、魔獣ってゆうのは、ドラゴンとか、悪い聖霊とかかな？とりあえず敵って覚えていて」

「あっはい・・・」

とにかく唾然とするしかないツバサだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「グオオオオ！！！！」

突然、馬鹿でかい唸り声が響いた。

シルキーが、ニタァッと笑って言い出した。

「私、運がいいみたい。」

「今の唸り声が魔獣・・・か・・・？」

ツバサは、シルキーにそう言って、戦闘体制に入った。

「ツバサ君、一緒に戦ってくれるの？」

「当たり前だろ？仲間じゃん？それに面白そうだ！」

「グギャアアア！！！」

銀色の大きな影が動き出した……………

二章終

第三章　銀の龍（前書き）

「グギャアア！！」

銀色の大きな影が動き出した。

その銀の影は、どす黒く怪しく光る目に、硬そうで、鋭い鋼の翼を持った巨体。

まさに銀の龍、鋼のドラゴンだった。

第三章　銀の龍

「あれを倒せばいいんだな？」

ツバサのサファイアの瞳は、ドラゴンに負けないくらい、怪しく光を放っている。

「うん。あれは、メタルドラゴン。鋼の体を持つ龍。

だけど私、やっぱり運が悪いかも・・・」

シルキーは、脅えた目をして、少し、引き腰になっている。

「何だよ。今更？それに、さっきは運がいいみたいって言ってたじゃねーか！」

「うん、そうなんだけど・・・メタルドラゴンってかなり強いほうの魔獣なんだよ・・・」

最初から強いよ・・・まだ私弱いのに・・・」

今度は、かなり脅えている。

「ハア？強いやつに勝ったら、すげー強くなるじゃねーか！それに、この先嫌って程、

強えーやつと戦うことになんだろ？

ツバサは、ドラゴンを睨みつけた。

そして、いきなりドラゴンに向かって、走り出した。

「あつ、ちょっと待って、ツバサ君！」

ツバサは、速度を緩めようとしなない。

それどころか、ドラゴンの手前で、高く飛び上がった。

「シルキー！何事も先手必勝だぞ！」

「だから、ちょっと待ってツバサく・・・」

「おらああ！」

ツバサは、ドラゴンに、強烈なかかと落としをは喰らわせた・・・
のだが・・・

（ガイイイイン）

「グルル・・・」

「・・・痛ってえええ！」

「あーあ・・・だから待ってって言ったのに・・・」

硬かった。それはもう硬かった。

「あのね、メタルドラゴンは鋼の龍だよ？とっても硬いの。」

「先に・・・言っておいて・・・」

「ツバサ君が私の話聞かないのがいけないんじゃないんじゃん」

「・・・ごめんなさい」

ツバサは真面目に反省した。

「グギヤアアア！！」

ダメージは、ほとんど無いが、かかと落としの衝撃で怒ったのか、
鋼の翼を振り下ろし、
ツバサを攻撃した。

（ドコン！）

「うおっ！危ね！」

間一髪で攻撃をよけ、シルキーに、聞いた。

「どうすればアイツを倒せるんだ？」

するとシルキーは深く深呼吸をした。

「あのね、メタルドラゴンは鋼。

鋼は炎に弱い。だから私の力で、すきを作るから、そこでツバ

サ君は、弱点に、

一撃入れてやって！」

「えっ、おう！」

「いくよ！」

すると、シルキーが、黄金の光に包まれた。

「火炎鳥！！」

光の中から、炎をまとった、美しい巨鳥が現れた。

「さすが神！カッケー！」

「ありがと。メタルドラゴンの弱点は、鋼の翼の内側だよ！」

「わかった！」

「それと、この能力、まだ上手く使えないから。

チャンスは一回限りだよ！魔力をためるから、メタルドラゴンの
気を引いて！」

シルキーの言葉を合図に、ツバサは、メタルドラゴンの周辺を素早く動き始めた。

「おい！ドラゴン！オレはこっちだ！」

「グルル！」

ドラゴン は、ツバサに集中していて、シルキーには目もくれない。そして、ツバサは、フェイントをかけて、ドラゴンの足元に一発、蹴りを入れた。

「グルル！？」

ドラゴン は、不意打ちに若干、バランスを崩した。

「やれシルキー！！」

「うん！」

火炎鳥の姿をしたシルキーは、空高く飛び上がり、口から巨大な炎の玉を出した。

「火炎弾！！」

勢いがよく、シルキーの放った火炎弾がメタルドラゴンに直撃した。

「グギャアアア！！」

メタルドラゴン は苦しんでいるのか、翼を大きく開いた。

「ツバサ君！」

「おう！オラァ！ドラゴン！その態勢から動くなァ！」

（ドゴッ・・・バリントッ！）

ツバサの一撃が決まり、ドラゴンの鋼の翼は砕け散った。

「「やった・・・？」」

「ギャルル・・・」

静かに鳴くと、メタルドラゴンは、銀色の宝玉になった。

「「やったアー！」」

「てか、コイツ宝玉待ってたんだ？強くなれたし、宝玉も手に入れて、一石二鳥じゃん！」

「そーだね！一つ目ゲート！」

そういつて、宝玉はシルキーに吸収された。

「これで、メタルドラゴンに変身出来んの？」

ツバサは、ワクワクした目でシルキーに聞いた。

「ううん・・・私は、まだまだ、魔力が足りないから、修行して、強くなって、

コントロール出来るようになってからだよ」

シルキーは、がんばらなきゃ、という風に、気合を入れた。

「そっかぁ」

ツバサは少し残念そうだ。

「でもまあよかったな？」

「うん！」

「月がきれいだぞお！」

シルキーは空を見上げて叫んだ。

(ポー・・・)

「どうしたのツバサ君、顔赤いよ？」

ツバサはぼーっとしている。

「んあ？少し熱っぽい」

「大丈夫？」

「ああ。平気だよ！」

「寝るところ探すぞシルキー」

「うん！」

二人の楽しそうな話し声が、
真夜中に響く・・・

第四章く医者?く(前書き)

ハア・・・だるい・・・

やわらかい日差しの中、意識が薄れそうになった。

第四章〜医者?〜

第四章〜医者?〜

「ハア・・・ハア・・・」

熱い吐息が漏れる。

「ツバサ君? 息・・・荒いよ? 大丈夫・・・?」

黄色い潤んだ瞳が、オレを覗き込む。

「ハア・・・あ・・・うん・・・平気だよ?」

とは言っても、オレの目に写る景色は、ユラユラとゆれている・・・

(ヤバイかもしれない・・・)

「そう? 大丈夫そうには見えないんだけど・・・?」

心配そうにシルキーはオレを見つめた。

「平気だよ・・・平気・・・・・・だいじょう・・・ぶ・・・」

「

(ドサツ)

そこで、オレの意識が途切れた。

「ツバサ君？ツバサ君！？・・・」
返事はない。聞こえるのは、ハア・・・ハア・・・という吐息だけだった。

（サアアア・・・）

シルキーは、一気に血の気が引いてくのを感じた。

「医者アアア！！！」

悲鳴に近い、シルキーの声が響く・・・

（バサツバサツ）

シルキーは火炎鳥の姿になり、ツバサを背に寄せ、空を飛んでいた。

だが、まだ上手く力を使えないシルキーは、近くの街に着く前に、もとの姿に戻ってしまった。

「うう・・・そんなあ・・・どうしたらいいのお・・・？」

シルキーの瞳からは、ボロボロと、涙が滴り落ちた。

「ツバサ君が死んじゃうよお！お医者さああん！」

シルキーは、ヒックヒックと喉を震わせ、必死に叫んだ。

「医者を探しているの？」

そこにいたのは、

ストレートの金髪を肩まで伸ばし、シルキーを写す瞳は、深い緑に染まっている。

とても神秘的な女性だった。

「ヒック・・・だあれ？ うっあなた？」

声を絞り出し、シルキーは聞いた。

「私はラルドⅡサイレント

学者 兼 医者よ」

ラルド、と名乗る女性はフフツと微笑むと、横になっているツバサの額に手を当てた。

「すごい熱・・・放っておいたら危ないわね。」

微笑んだのとは逆に、今度は、苦虫を噛み潰したような表情をして、シルキーを見た。

「あなた、名前は？ それと、この子の名前。」

シルキーは、ラルドを見て、真剣な顔つきで名乗った。

「あたしはシルキーⅡオリビアです。

こっちは、ツバサ。名字は、教えてもらっていません。」

「そう。シルキーちゃんにツバサちゃんね？」

状況は大体分かったわ。私の家へ来なさい。」
そう言うのと、ラルドは、ツバサを抱き上げ、歩き出した。

「（ツバサちゃん？）あっありがとうございます！！」

ラルドがツバサの事を女の子のように呼んだ事を、シルキーは不思議に思ったが、

ツバサの事で必死だったシルキーは、何も聞かずに、ラルドの後を着いていった。

そこは、目指していた街の外れにある、かなり立派な家だった。

「ここ？ですか・・・？」

「ええ。そうよ。そしてシルキーちゃん？悪いけど、

ツバサちゃんをベットまで運んでくれないかしら？色々と準備があるからね。

結構重症だし、なるべく、手早くしたいのよ。ベットは、

玄関を上がって、右側に並んでいる二つの部屋の左側よ。お願いね。」

ラルドはそう言って、シルキーにツバサを託すと、ツカツカと歩いていき、

ここから見える、一番奥の部屋へ入っていった。

「それにしても広いなあ。

って、そんな事いつてる場合じゃなかった！急がなきゃ！」

ツバサを抱き直し、シルキーは、ラルドに言われた通りの部屋へ、ツバサを運んだ。

「ほええ・・・なんだかちよつとなあ・・・」

その部屋は、病院の治療室と言ったらいいか、謎の液体や道具などが、

部屋のあちこちに、おいてあった。

整頓されていて、清潔だし、標本や、そういった類いの物が置いてある訳ではないが、

なんかちよつと・・・正直言ってかなり不気味だった。

そこにあったベットにツバサを寝かせ、シルキーはその隣にあったイスに腰掛けた。

ツバサの様子を見ると、相変わらず、荒く息をしていた。

「ツバサ君・・・」

（ガチャッ）

ドアが開く音が響いた。

「遅れてごめんなさい。今から、応急処置を施すから、シルキーちゃんは、

外で待っててちょうだい」

ラルドに言われた通り、シルキーは部屋を出た。

（カチカチ）

時計の音が響く中、シルキーはとても不安だった。

ツバサの様子が気になるのもあるが、もう一つ、ラルドとツバサのいる部屋から、強力な魔力を感じるのだ。

「どうして魔力を感じるんだろ？ラルドさんは、部屋の中でなにをしているのかなあ？」

ついに我慢仕切れなかったシルキーが部屋の扉をゆっくりと、少しだけ開いた。

「ええっ？」

そこにいたのはさっきまでのラルドとはまた違った、冷酷な目をそたラルドだった。

そして、ツバサの額に手を置き、ブツブツと静かに何かを唱えていた。

「呪文かなあ？」

その光景は、明らかに、ラルドが魔法を使っているようにした見えなかった。

「何でラルドさんが魔法なんか使っているの・・・？魔法とは、別の何かなのかなあ？」

その時、

（ドカツ）

「いだっ！」

ラルドが勢い良く開いた扉が、シルキーの顔面にヒットした。

「あら、シルキーちゃん？そこにいたの、ごめんなさい気付かなかったわ。

大丈夫？」

「ふあい！らいじょーぶれす！」
シルキーの顔は、真っ赤だった。

「・・・・・・・・舌が回ってないわよ・・・・・・・・？」

「ツバサちゃん、今は眠っているわ。シルキーちゃん
？様子を見に行ったらあげれば？」

「ふあい！あいがとーございました！」
相変わらず、舌が回らないシルキー。

「うーん・・・・・・・・ちゃんと喋れるようになってから、いったらどう？」

しばらくして、シルキーは、気になっていたことを、
聞いてみる事にした。

「ラルドさん、今日はありがとうございました。ですが、
一つお聞きしたい事があるんですが・・・・・・・・」

シルキーは、正直いうとかなり不安だった。
本当に魔女だったら、自分は、殺されてしまうかもしれない。

「どうしたの？何でも聞いてちょうだい？」

そして、ついにシルキーは、口を開いた。

「あなた、魔女ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一瞬ラルドの頬がピクッと反応した。

それと同時に、とてつもない殺意を感じた。

すると、ラルドは、まるで蛇のような恐ろしい顔で、シルキーを睨んだ。

「勘がいいわね、小娘」

その一言に場の空気が一瞬で、凍りついた。

四章終

第五章　魔女（前書き）

「勘がいいわね、小娘」

ラルドの一言は、鋭く、そして冷たく響いた。
すべてを恐怖に変えながら・・・

第五章　魔女

5章　魔女

シルキーは、冷や汗を流し、ガタガタと震えていた。

「ラ、ラルドさん・・・？　わ　私たちをど　どうするつもりですか？」

恐怖のあまり、意識が薄れていく中、シルキーは、やっこの思いでラルドに聞く。

「さあ・・・？　殺して実験材料にでも使おうかしら？」

（だ、ダメだ・・・殺される・・・）

シルキーは、完全に意識を手放した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

どれくらいの時がたったのだろうか？

フカフカとした、柔らかいベットの上で、シルキーは、目を覚ました。

「ふうあー・・・。あれえ？　私何してたんだっけ？」

トロンとした目をこすりながら、シルキーはベットから、

起き上がり、リビングに向かおうとした。

「えーと・・・確か？ラルドさんに魔女かって聞いて・・・」
そこでシルキーは、気を失う前、何があったのかを思い出した。

「はっ！ツバサくんが危ない！！」

（バンッ！）

扉を開いた先にいたのは・・・

（ズズッ）

「ぷはーこのコーヒうめーなあ・・・」

「おかわりするならいつて頂戴」

コーヒーを飲むツバサとラルドだった。

（ポカーン）

「ツ、ツバサ君？ラルドさん？」

「あら。目覚めたのね？」

さっきは、脅かしてごめんなさい。シルキーちゃんたら気絶
してしまうんだもの、こっちが驚いたわ？」

にこやかな顔をして、ラルドはシルキーに話しかけた。

「だって！ラルドさん魔女だって言ったじゃん・・・！」

「落ち着けシルキー。確かにラルドは魔女だけど、人を襲うような魔女じゃないんだよ。」

そういつてシルキーを説得するツバサ。

「えっ？じゃあラルドさんは、優しい魔女なの？」

シルキーは、少し安心したように言った。

「ええ。まあ簡単に言ってしまうとそういうことよ。」

シルキーは完全にラルドへの警戒心をとき、その後ラルド、ツバサ、シルキーの

三人は、しばらくの間、話していた。

「そうねえ・・・」

「でしょでしょ？」

「んあそうなの？」

・・・5分後・・・

「だからさあ？」

「だよねえ・・・」

「あら・・・」

・
 ・
 ・
 10分後
 ・
 ・
 ・

「そうなんだよ！」

「わかったよ」

「そうよねえ」

・
・
・
30分後
・
・
・

お前ら話なげーよ！

「あら、もうこんな時間」

「早えー・・・」

「早いなあ」

ツバサとシルキーは、何だかつまらなさそうな顔をしている。

「それにしても、女の子2人で旅なんて、大変ねえ？」

ラルドは、少し心配そうに、二人を見た。

「えっ？二人って？ツバサ君は、男の子じゃん？」

シルキーは不思議そうにラルドを見た。

「あら、きずいてないの？シルキーちゃん。」

ツバサちゃんは、おん「ちよつとまつてー!!!」

ラルドが何か言おうとした時、ツバサは、なぜか、ラルドの

言葉をさえぎった。

「ラルド！てめーそれ以上喋んなよ！？」

ツバサは、焦っていた。

「なんでえ？なんて言ったの？ラルドさん！教えてえ？」

「ラルド！ぜってー言うなよ！」

ツバサは、大声で、ラルドを止める。

「ハア………ツバサ？うるさいわ？少し黙ってなさい！」

「え？」

ラルドが怒鳴った瞬間、ツバサは、謎の黒い煙のようなものに飲み込まれた。

「うわ！なんだこれ！」

煙が消えると、眠っているツバサがいた。

「ツバサ君！？」

「大丈夫よ。ただ眠らせただけ。うるさいんだもの。」

ラルドがそういつて笑うと、シルキーも笑った。

「へへ……ラルドさん？話の続きを……」

「ええ。あのね？ツバサは……」

（ゴニョゴニョ）

「ええ!!!? ツバサ君は女の子なのお!?」

シルキーは、心底驚いているようだ。

「まあ・・・本人は隠しているみたいだけどねえ・・・」

「うーん・・・ラルドお・・・隠してたのに!」
そこでツバサが目を覚ました。

「あら? バレバレだったわよ?」

「お前にとつてはだろ!?」

ツバサは今にも泣き出しそうだ。

「よろしくね。ツバサちゃん?」

「ちゃんをつけるなあ!」

「じゃあなんて呼べばいいの?」

「・・・呼び捨てでいい。」

「アハハ! ツバサ? こうでいいの?」

シルキーは楽しそうに笑う。

ツバサも泣き出しそうではあるが、どこか笑っているようにも見えた。

そんな2人を見て、

「ハア・・・あなた達、旅を続けるの?」

「「うん！」」

するとラルドが、

「あなた達？旅じゃないとダメなの？」

「え？どういう意味？」

ツバサはラルドに聞く。隣では、言葉には出さないが、シルキーも意味がわからないようだ。

「えーとね？ちゃんとした家に住んで、そこを拠点にして、依頼を受けて冒険するみたいな事ではダメなの？」

「そっちのがいいんだけどさぁ・・・」

「家はないし、家を買うだけのお金もないの。」
ツバサとシルキーは、困った顔をしている。

「うーん・・・遠まわしに話した私が悪かったわ。だからね？2人で私の家に
住まない？そう言いたかったのよ。」

・・・

「えっ！？いいの（かよ）！？」

「ダメだったと言わないわ？」

2人は声をそろえて・・・

「よろしくお願いします！ラルド！！」

「ウフフ。よろしく、ツバサ、シルキー？2人で話し合って、自分の部屋を決めなさい？」

「だって！どうする？ツバサ？」

「オレは二階はいいな？」

「じゃあ、あたしも二階がいい！」

（キャハハ）

（クスッ、かわいいわね）

2人の少女の子供らしい様子がラルドにとっては、とても微笑ましく感じた。

5章終

第六章く夢のマイホーム？く（前書き）

フワフワのベッド。

柔らかい枕。

カーテンから漏れる光。

「ハア・・・・・・・・幸せ・・・・・・・・」

暖かい日差しが差す朝、ツバサは幸せそうに目を覚めました。

第六章く夢のマイホーム？く

第六章く夢のマイホーム？く

「ハア……幸せ……」

ツバサと同じように、シルキーも幸せそうに目を覚ました。

「うーんそろそろ起きなきゃなあ」

シルキーは、まだ眠たそうな目をこすりながらベットから出て、リビングへ向かった。

（ギシッ……ガチャッ、トコトコ）

「ラルドお……おはよー……」

「おはようシルキー。朝ご飯できてるわよ。」

テーブルには、ハチミツがたっぷりとかかった、2枚のホットケーキ。

レタスとベーコンのサラダ。

隣には甘い香りのするアップルティーが置いてある。

「うわー！おいしそおー！ねえ、ラルド！食べていい？」

シルキーは甘いものが好きなようで、目の前のごちそうに目を輝かせている。

「シルキーちょっと待って？どうせならみんな一緒に食べたいでしょう？」

ツバサが来てからね」

すると、目を擦りながら、2階からツバサが降りてきた。

「ゴメン、気持ちよくて二度寝しちゃった。おはようシルキー、ラルド。」

「ツバサ遅いよお！早く食べよう！」

「ああ悪い悪い」

ツバサはそう言いながらシルキーのとなりに座った。

「ツバサ起きたし食べましょうか。」

「「いただきます」」

（カチャカチャ、もぐもぐ）

「うーん、おいしーい！」

「うまいなあゝまともにメシ食ったのいつぶりだろーな？」

ツバサとシルキーは、一度も手を止めず、テーブルにあった料理をあつというまにたいらげた。

「「ごちそうさまあー!!」」

ラルドは、ハアハアと肩で息をする2人を見て、ア然とした。

「そ、そんなに息切れするほど必死に食べなくても・・・いいんじゃない・・・？」

「「だっておいしい（うまい）んだもん！」」

「あ・・・そう。ありがとう・・・」

ラルドは、少し呆れたような顔を見せた。

「ところであなた達、依頼は見つかったの？」

・・・

「見つからない。」

少しの間、沈黙になったが、ツバサは真剣な目をして、そう言った。

「お金が無いなら、この家出て行って貰うわよ？」

「「え・・・・・・？」」

2人は、絶望に満ちた顔をして、ラルドを見た。

「な、ちょっと・・・冗談に決まっているでしょう・・・？」

ここまで落ち込むとは思っていなかったラルドは、慌ててそう言った。

「「ああー・・・・・・ハア・・・・・・」」

2人は、安心したのか、大きな溜め息を漏らした。

「なあラルド・・・どうしたら依頼見つかるかなあ・・・？」

不安そうな目つきでツバサは、ラルドに聞いた。

「さあ・・・わからないわねえ・・・」

・・・一時間後・・・

「むにゃむにゃ・・・」

ツバサ達はお腹がいっぱいになったようで、
優雅にお昼寝タイムをとっていた。

「あら、よく眠っているわね・・・」

二人の寝顔を見ていて、ラルドは目蓋が重くなるのを感じていた。

「い・・・依頼い・・・」

「!?!?・・・ね、寝言よね・・・?」

眠っているツバサの額は、うっすら汗ばんでいる。

「まあ・・・ゆっくり頑張ってちょうだい。出て行けなんて言わないから・・・。」

そしてラルドは、二人の隣で眠った。

・・・（ドンドンドン!?!?!ドンドン!?!）

「ハアハア・・・誰かぁ! いますかぁ! ハア・・・助けてえええ!

!?!?!?!?!」

!?!

「なにになに!?!どーしたの!?!」

突然の音にシルキー達は飛び起きた。

「オレが出るよ」

ツバサはそう言って、玄関に向かって歩き出した。

「女の子の声だったね・・・」

「そうね。助けを求めているようだったけど・・・」

・・・

「ずいぶん長いわね・・・」

「なんか話しているみたいだよ」

「依頼だ！依頼い！！」

ツバサは、淡いピンクの髪を後ろで縛った一人の少女をつれてきた。

「あ・・・あのお願いがあって来たんですけど・・・」

ピンクの髪の少女は困った顔をしてそう言った。

「あら何か困っているのね？あなたの名前、教えてくれる？」

ラルドはこどもをあやすような、優しい目をして言った。

「はい。私は、古宮ルイと言います。」

ルイは、真剣な目をして言った。

「私の依頼・・・受けてくれますか・・・？」

第六章終

第六章　く夢のマイホーム？　く（後書き）

更新遅くなってすみません＞＜
やっと終わりましたあ・・・
見てくれてありがとう♪
これからもヨロシクハハ／

H
&
a
m
p,
Y

第七章　ルイと包丁男（前書き）

「ルイ？依頼の内容は何なんだ？」

助けを求めて、家に来た少女ルイ。
ある依頼をツバサに持ちかけたのであった。

「えーと依頼の内容は・・・」

（パリーン）

「キヒヒヒヒ！ミツケタ・・・コムスメ・・・」

第七章　　ルイと包丁男

第7章

　　ルイと包丁男

「人の家壊して入るだなんて・・・いい度胸じゃない？依頼の内容は大体あの男を倒すってことでしょう？」

ラルドは、鬼の形相で、包丁男を睨んだ。

「は・・・はい。あの人に追いかけて・・・」

「ふーん・・・ツバサ！シルキー！思いっきりぶちのめしなさい！」

鬼の形相はそのままに、ラルドはツバサたちに命令口調でどなりちらした。

「「はっはいいいい！」」

あまりの恐ろしい顔だったので、ツバサとシルキーは、包丁男を倒すため、

戦闘態勢に入った。

「って・・・ラルドも戦ってよお！」

シルキーは、ラルドにむかって叫んだ。

「2人とも大丈夫でしょうか・・・？」
ルイは、心配そうに2人に声をかけた。

「ああオレは大丈夫だよ。強い相手と戦うときはなんかワクワクするんだ。」

「ラルドオ！怖いよお！助けてよお！包丁持ってるよお！」
シルキーは、泣きながらラルドの足にすり寄っている。

「ハア情けないわね・・・。まあでも、これ以上家が壊されるのも嫌ねえ・・・。」

仕方ないわ。少しだけサポートしてあげる。」

「キヒツキヒヒ・・・オンナヒトリニ・・・ナニガデキル・・・」
包丁男は、ラルドを見ながら不気味に笑った。

「なにができるかって？今見せてあげるわ。ちょっと止まってなさい！」

包丁男に向かって叫び、ラルドは助走をつけ、高く飛び上がった。

「暴れるなら・・・」

「キヒツナニ！？」

「外で暴れてちょうだい！！」
(バキッ)

ラルドは包丁男に華麗な回し蹴りをお見舞いした。

「グギャア！」

ラルドの回し蹴りを受けた包丁男は、衝撃で外に吹っ飛んだ。

「ハア・・・無駄な体力を使わせないでちょうだい。後は任せたわよツバサ、シルキー」

そういつてラルドは、自分の部屋に戻っていった。

「ハハ・・・すげーなーラルド・・・」

「スゴイね・・・」

「スゴイですね・・・」

ツバサ、シルキー、ルイの三人はただ啞然とするしかなかった。

「早く外に行って、あの包丁野郎倒さなくちゃな」

「うん！行こうツバサ！ルイちゃんはここで待っててね」

シルキーはルイに、ここで待てと伝えると、ツバサと共に走っていった。

そして外へ出ると・・・

「キヒ・・・オマエラ・・・！アブナイ・・・」

包丁男は、二刀の包丁を2人に投げてきた。

「なんでもこいやあ！包丁男！」

そして、包丁男とツバサ&シルキーの戦いが始まった・・・

7章終

第七章　ルイと包丁男（後書き）

いつも読んでくれる方！
本当にありがとう^^／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9765o/>

絆は途絶えない

2011年10月8日07時07分発行